

サガン『ブラームスはお好き』における音楽的一考察

西岡 杏奈

はじめに

この小説はフランスで1959年に出版された。1954年に『悲しみよこんにちは』でデビューしてから、『ある微笑』『一年ののち』に続く四番目のサガンの小説である。映画化は1961年に、人気歌手のイヴ・モンタンを起用して作られている。処女作は南フランスが舞台だったが、その後はサガンお得意のパリを舞台にした物語が続き、この作品も例に漏れない。パリで暮らす39歳の女性が主人公である。

「ブラームス」といえば「子守歌」が思い浮かぶ私だが、今回は題名にある「ブラームス」から音楽をテーマにするという単純な思いつきでこの作品を考察してみようと思う。『ブラームスはお好き』(Aimez-vous Brahms?)のなかで、音楽に関係する部分を引用し、物語における音楽の役割を詳しく述べる。本稿では、音楽的キーワードとして「車のラジオ」、「キャバレー」「ブラームスのコンサート」という三つの点に注目し、考察していく。「ラジオ」というのは、この小説のなかでポールの恋人ロジェの車のラジオに限定される。物語中のラジオはポールに人生について考えさせ、ポールが別の男性と行ったブラームスのコンサートの中継をロジェに聴かせるという役目を果たし、ロジェにポールの大切さを思い起させるというメッセンジャー的な役割が当てられている。これはサガン自身の車に対する情熱から来る擬人化にも近い大役である¹⁾。車のラジオという何気ない「物」に実は大きな意味があるという“さりげなさ”がサガン流であり、彼女の文体の軽さを生み出し、これが彼女にとってのエレガンスなのだ。

「キャバレー」は時代背景を表す音楽的要素を持ったものとして考察していきたい。1950年代という時代のパリを象徴するものとして物語を色どり、またパリの夜遊びが好きだったサガンらしさが出るものとして捉えられるだろう。それと同時にポールとロジェの考え方の違い、すれ違い、といった微妙な関係性を表

す場面設定として注目する。「ブラームスのコンサート」はこの物語の中核となる場面で満を持して登場する。ブラームスのコンサートがただ単にポールとシモン(25歳の青年、ポールに夢中)とのデートの舞台として用意されただけではなく、ポールの内省につながり、現状からの脱却を促すきっかけを与えるものとして機能しているという点に注目している。

本稿では引用を原文で行い、訳は著者によるものである²⁾。

第一章 「ラジオ」

最初のキーワードである「ラジオ」に関して、ラジオはもちろん音楽を聴くだけのものではない。しかし「車のラジオ」と限定されると、連想されるのが「音楽を聴きながらドライブ」という役割ではないかということで、ここでは音楽的要素として扱う。ラジオがどのように表現され、それがどのように作品に関係しているのか、果たす役割は何なのかをみていく。

Dans la voiture de Roger, elle mit la radio d'une main distraite. Elle entrevit une seconde, sous la lumière blafarde du tableau de bord, sa propre main, longue et soignée. Les veines s'étaient étalées dessus, s'entremêlaient en un dessin désordonné. «À l'image de ma vie.», pensa-t-elle, puis elle réfléchit aussitôt que cette image était fautive. Elle avait un métier qui lui plaisait, un passé sans regrets, de bons amis. Et une liaison durable. Elle se tourna vers Roger. ;

«Combien de fois ai-je fait ce geste ; allumer la radio de ta voiture en partant dîner avec toi?—Je ne sais pas.»³⁾

ロジェの車の中で、彼女はうわの空の手でラジオをつけた。そしてダッシュボードの青白い光のもとで、自分自身の長くよく手入れされた手を一瞬ぼんやりと見た。静脈がその下に広がり、無秩序な模様

に混ざり合っていた。「私の人生のようだよ」と彼女は思ったがすぐにそれは偽りのものだとすることに気付いた。彼女には自分の気に入った仕事、悔いのない過去、いい友達があるのだ。それに長続きしている恋愛も。彼女はロジェの方を見た。「何回この動作をしたかしら、ディナーに出かけるときにあなたの車のラジオをつけるっていう動作を。」「さあね。」

この物語の中で、車のラジオが果たす役割はその描写にかけられた行数に比べて大きい。物語のはじめの方、ポールとロジェはいつものようにロジェの発案で夜の街に繰り出す。今夜はまず食事して、そのあと踊りに行こうという計画だ。その行き道の場面である。この引用のなかで、より象徴的に感じられるのはポールの手に関する描写かもしれない。サガンは女性を描写するときによく手を使う。「手が一番年齢が出る」といった女性誌の美容記事さながら、サガンは手で女性を表現するのだ。しかしここではポールが自分の手を見つめるきっかけが「ラジオに手を伸ばした」という行為だったというところに注目する。このポールの「なにげなくラジオを付ける」という行為は、自分の手を見つめ、ふと自分の人生、ロジェとの関係、自分が経てきた時間を考えるきっかけとして、連想の起点としての役目を果たしている。そしてこの自分自身への問いかけはこの後、物語の中心的テーマとなっていく。この何気ない動作の永続性に気付いたときに、ロジェとの関係がリンクされ、思わず口にする。「この動作を何回繰り返したかしら。」こんな質問ではもちろん微妙な女心が隠れているなんて思いもよらないロジェは一言「さあね。」と返す。

ポールのこの問いには「今まで同じことをずっと繰り返してきたんだわ。これをこれからも続けていくのかしら・・・」という将来への漠然とした不安があふれている。こんなことを言ったところでロジェはポールの気持ちに気づくはずもないことくらい彼女も分かっているはずだし、そんな男と何年も一緒にいることを選んだのは自分自身だということも痛いほど分かっている。現状に甘んじ、ひとり将来への漠然とした不安を抱きながらも、相手の男に面と向かって「私たちがどうなっていくの？私のことどう思ってるの？」と聞ける女性ではないのだ。何か彼女を制しているのかもしれない。はっきり尋ねずに、探りを入れるように回りくどく聞いてしまう、それがポールという女性の性格を表している。

一種の「あきらめ」かもしれない。39歳という年齢、ロジェの性格を知った上で彼のわがままを許容してきた自分、仕事の忙しさ、金銭面でのやりくり・・・。こういったものが混在して、「あきらめ」が芽生え、毎日を過ごしているうちに、それを払拭しようというエネルギーはどこかへ消滅してしまう。過去の大金持ちの夫との生活と決別し、新たに始めた刺激的に見えたロジェとの付き合いも結局は彼女の遊びや、夜中まで踊りに行くこと、若く見せるためのスピード狂振りにはついていけなくなってきた自分に気づく。

おそらくポールはロジェも自分と同じように、年月を経れば変化していく、落ち着いていくものだと思っていただろう。現実には40歳を過ぎて、スピード狂、夜遊び、浮気、を繰り返すロジェだった。彼はポールを愛していた。しかしそれよりも自分を愛していた。

«Un sale petit objet incommunicable, prétentieux, vulgaire et avec qui je fais bien l'amour.» il se mit à rire tout haut. Elle ne lui demanda pas pourquoi mais tendit la main vers la radio. Roger suivit son geste des yeux . . . Qu'avait dit Paule, l'autre soir? Au sujet de la radio et de leurs soirées . . . ? Il ne se rappela plus. On diffusait un concert qu'elle coupa, puis auquel elle revint faute de mieux. C'était du Brahms, disait le speaker, d'une voix chevrotante, et les applaudissements crépitaient.

«Quand j'avais huit ans, je voulais être chef d'orchestre, dit-il. Et toi?

— Moi, je voulais faire du cinéma, dit-elle, et j'y arriverai.»⁴⁾

「こんなたちの悪い、コミュニケーションもろくに取れない、気どりの下品なのと自分は寝ているんだ。」彼は高笑いし出した。彼女は彼に理由も聞かず、そのかわりにラジオの方へ手を伸ばした。ロジェは彼女の動作を目で追った・・・。

あの晩、ポールは何を言っていたっけ？ラジオと自分たちが出かけること・・・？彼はすでに覚えていなかった。彼女はコンサートが放送されていたがそれを切り、それから仕方なく戻した。それはブームスだと男性アナウンサーが震えた声で言っていた。そして拍手が鳴り響いていた。

「8歳の時、僕は指揮者になりたかったんだ。君は？」と彼は言った。「私は映画をやりたかったの。そしてそうなるわ。」と彼女は言った。

ラジオの描写は常にロジェの車の中である。この場面はロジェがポールとの週末をすっぽかし、女優志望のメイジーという若い女の子と浮気旅行に行った帰り道での出来事。メイジーはポールとは対照的な女性として描かれている。

若く、女優になるためには手段も選ばない、野心を持っているメイジーは、まるで重大な秘密を告白するように、もったいぶって自分の本名はマルセルなの。と言うような女性で、「どうでもいい！」とロジェも言いたいだろうが、それが彼の選んだ現在の浮気相手なのだ。だいたい、ロジェの浮気は今に始まったことではなく、ポールもそのことを知っていて、ばれる度に許してきた。ロジェの言い分は「ただの浮気だよ」というものであり、ほんとに大事なものはポールなんだから、とポールを言いくるめてきたのだ。

帰り道、車のなかでメイジーが「何気ない動作」でラジオを付け、それがロジェにはポールを思い起すきっかけになった。しかしここではポールが何を言っていたのか思い出せないロジェである。すなわちポールが何か言っていたことに重要性は感じていない。

偶然にもここでブラームスのコンサート中継が流れる。それはポールとシモンが行っているコンサートであり、鳴り響く拍手の中には二人の拍手も含まれているだろう、しかしそんなポールの日曜日を何も知らないロジェは、ブラームスのコンサートの中継を聴き、そこから自分の幼いころの夢を思い出し、「指揮者になりたかった」などと口走る。過去形である。それに対し、メイジーは映画をやりたかったし、そうってみせる、と未来形で話す。いくら若ぶってみても結局過去形でしか夢を語れなくなってしまったというのがロジェの現実だった。

Il roula un moment, les sourcils froncés, puis tendit la main vers la radio et se rappela ;

«Chérier, pensa-t-il, chérier, c'était Paule et moi.» Il n'avait plus de goût à rien. Il l'avait perdue.⁵⁾

彼は、眉をしかめてしばらく車を走らせた、そしてラジオに手を伸ばし、思い出した。「深く愛する、ということ・・・深く愛する、それはポールと自分のことだったのに。」彼はもはや他の何にも興味がなかった。彼はポールを失ってしまったのだ。

物語も後半、ポールとシモンと一緒に過ごすようになってから、ロジェは相変わらず気にもせずにメイジ

ーと田舎へ旅行していた。しかしメイジーにも飽きてきたのだ。最近では「彼女づら」を始め、ロジェに「シェリ chéri (愛しい人)」などと呼びかけてしまった身の程知らずのメイジーに苛立ったロジェは、大切なツイードの上着も置きっぱなしで、メイジーを置き去りし、車に乗り込んだ。そしてラジオの登場である。やっとラジオに自分で手を伸ばしたロジェはポールが自分にとってどれほど大事な人だったかを思い出す。しかしポールは25歳のシモンと関係を始めてしまっている。失ってから気付く大切なもの、の典型である。

このように『ブラームスはお好き』においてロジェの車の中のラジオは思いのほか物語に深く関係しているオブジェだということが分かる。このアイデアはまた、サガンらしさがよく出ている。サガン自身スポーツカーを運転するのが大好きで、スピードへの情熱は、一種の眩暈を引き起こす遊び道具（たとえばジェットコースターなどの）として彼女にとって必要不可欠なものであった⁶⁾。死と隣り合わせの陶酔感という極限の精神状態を自らの運転によって得られる車は彼女にとって大切な「おもちゃ」だった。サガンの車中のラジオは、その限られた空間性（車の中）と限られた物質性（車のラジオ）によって、最小の描写から無限の空間描写（頭の中）が出来るという効果的なツールとしてサガンらしい小道具の一つである。車の中にあるものというのは限られている。だいたいどの車でもその装備は同じである（特に1950年代の車では）。ラジオは大体運転席と助手席の間にあるだろう。部屋のラジオだった場合、その部屋の雰囲気、物の位置関係などを描写すると読者はそちらに気がいってしまい、ラジオの象徴性に気付きにくかっただろう。この逆フォーカスの視点はサガンが愛読したプルーストの「紅茶とマドレーヌ」に通じるものがあると感じられる。この「ふと何気ない動作」から急にさまざまなこと頭の中で溢れだす、ということは誰しも経験することではないだろうか。だからこそ、読者への無意識的な共感への誘導がなされ、これがこの小説の中での「車のラジオ」という繰り返された舞台設定の効果であると考えられる。「車のラジオ」というさりげない、主張もしない小さな場所からポールはロジェとの関係、自分の人生について考え出すきっかけを見出し、ロジェは子供のころの夢を思い出し、また自分のせいで失ってしまった大切なものを思い出すのだ。この場面でのラジオによる思考の喚起性は、この物語のなかで繰

り返されることで、そのことが強調され、さらに物語の中心である主人公たちの心理描写とその変化の過程というものをさりげなく効果的に描き出し、それが物語の「流れ」を生み出している。

第二章 「キャバレー」

次のキーワードは「キャバレー」である。キャバレーということば自体に時代を感じるものだが、ここではあえて原文の *cabaret* を尊重したい。昔「カフェエ」という日本に移入されたフランス文化が「女給さんのいる酒場」だったように、この語も日本では「ホステスが歓待してくれ、なおかつバンド演奏があり踊れる（ホステスさんと）」というものになったようだが、この作品中にサガンが使う「キャバレー」は現在「クラブ」と呼ばれるような踊りがメインの場所である⁷⁾。「音楽（生演奏）がガンガン流れてるバーで、ダンスフロアもあり」みたいなものであると把握しておくことにする

Il la conduisit dans un nouvel endroit, un sous-sol du boulevard Saint-Germain, décoré en square, baigné d'ombres et qu'un pick-up inondait de rythmes sud-américains.

«Je ne peux pas sortir tous les soirs, dit Paule en s'asseyant, j'aurai cent ans demain. Déjà, en me levant ce matin . . .»⁸⁾

ロジェはポールを新しい場所に連れて行った。そこはサンジェルマン通りにある地下のところで、広場のようなインテリアにされていて、暗闇のなかに浸っていて、レコードプレーヤーは南米のリズムを流していた。「毎晩は夜遊びできないわ。」とポールは席に着きながら言った。「明日100歳にでもなったように感じるわ。今朝だって起きるときにね・ ・ ・」

数行ではあるものの、この描写から1950年代のパリの風俗が垣間見られる。1959年はぎりぎりかもしれないが、第二次大戦後、サンジェルマン・デ・プレ界隈は「イケてる夜遊びスポット」としての地位を誇っていた。サンジェルマンにはサガンがのちに“仲良し（恋愛関係が噂された）”になるジュリエット・グレコ、尊敬してやまないサルトル、そしてジャズプレーヤー、小説家として有名なボリス・ヴィアンなどが

集い、サブカルチャーを発信、けん引していった場所である。アメリカから渡ってきたジャズもここで定着し、この音楽の黒人性をアメリカとは違った形、つまり「エキゾティスムへの憧憬」のような形ですんなりと受け入れ、評価した場所でもある。このようなジャズを聴ける、踊れる場所は（以前はジャズはダンスミュージックだったのだ）描写にあるように地下にあるため、「cave カーヴ」=ワインの地下貯蔵庫と呼ばれた。「南米のリズム」というのがまたこの時代をよく象徴している。ボサノヴァなどの民族音楽から派生したワールドミュージックはジャズとの親和性も良く、世界的に流行した⁹⁾。

ロジェはこのような場所に出かけるのが好きだったが、ポールはそうではない。ロジェはスピードを出すのと同時に、若ぶりたいので、こういうところへ行かないとだめなのだ。この引用に続く場面では、シモンが偶然にもそこに現れ、美しい25歳の青年にロジェが敵意をむき出しにする、という場面が描かれる。たしかにこのカーヴという設定は、ロジェとシモンを比較するには都合がいいように思われる。シモンにとっては普通の遊び場であり、ロジェにとっては自分の若さを確認するために必要な場所であり、飲酒もしないポールにとっては馴染めないがロジェのために来る場所なのだ。

Un soir, il descendit un escalier sombre avec un ami et se retrouva dans une petite boîte de nuit qu'il ne connaissait pas. Ils avaient beaucoup bu, ils recommandèrent à boire et devinrent tristes à nouveau. Puis une femme noire vint chanter, elle avait une immense bouche rose, elle ouvrait les portes de mille nostalgies, elle allumait les feux d'une sentimentalité désespérée ou ils se laissèrent glisser ensemble.

«Je donnerais deux ans de ma vie pour aimer quelqu'un, dit l'ami de Simon. — Eh bien, moi j'aime, dit Simon, et elle ne saura jamais que je l'aimais. Jamais.»

(. . .)

Ils invitèrent la chanteuse à boire ; elle était de Pigalle, mais elle rechanta comme si elle arrivait de la Nouvelle-Orléans, offrant à Simon étourdi une vie bleutée et tendre, peuplée de profils et de mains tendues. Il resta très tard, tout seul, à l'écouter, et retra dégrisé chez lui, à l'aube.¹⁰⁾

ある夜、彼は男友達と暗い階段を下り、小さな知らないナイトクラブに行き着いた。彼らは相当飲んでたが、さらに飲むものを注文し、再び悲しくなった。そして一人の黒人の女が歌いにきた。彼女は分厚いバラ色の唇をしていた。彼女は数々の郷愁の扉を開き、彼らが共に知らぬ間に移ろいゆくままにしていた絶望的な感傷を刺激した。「人生の二年くらいなら誰かを愛するのに費やしてもいいかな」と友達は言った。「僕は恋してるよ。そのことを彼女は絶対に知ることはないだろうな、絶対に。」とシモンは言った。(. . .) 彼らは歌手に飲み物を奢った。彼女はピガール出身だったが、まるでニューオーリンズからやって来たかのように、ブルースがかかった、優しい人生を、多くの横顔と緊張した手で満ちた人生を、酒で朦朧としたシモンに歌った。彼は遅くまで一人で彼女の歌を聴くために残り、夜明けに酔いから醒めて帰った。

サガンの音楽に対する情熱はクラシックにとどまらずジャズにも注がれた。サガンは *Avec mon meilleur souvenir*¹¹⁾ (『私のための優しい回想』) のなかで、ジャズ歌手ビリー・ホリディについて書いている。サガンはデビューから数年後、アメリカの出版社に招待され、旅行したときに本場のジャズを聴きに行き、ビリー・ホリディを紹介される。感動したサガンは毎晩通常営業を終えたジャズクラブでジャズミュージシャンたちが自分たちの楽しみに演奏する場に呼んでもらい、滞在中毎日夜中の3時か4時から11時や昼までレディ・デイの歌と仲間たちの演奏を聴いた。その後ビリー・ホリディがパリにライブで来た時に再会するのだが、その姿にサガンの知っている彼女の面影は無く、声も変わっていて、麻薬のせいで正気ではないようにみえた。ビリー・ホリディは「もうすぐ死ぬ」と予言めいたことを言い、確かにそうだった。サガンは思い出を胸にこのエッセーを書いた。

ビリー・ホリディはそういうわけで、サガンにとって特別な存在である。この伝説の歌手が亡くなったのは1959年であり、『ブラームスはお好き』がフランス本国で出版されたのも1959年であるということを経験的な方法で結び付けることはできるだろうが、ここではその事実だけを述べておくにとどめる。

この見知らぬナイトクラブで黒人女性歌手が歌う場面は、『ブラームスはお好き』の中の今までのサガンの文章からすると、不自然な印象を受ける。脇役の写真には長く、凝っている。同じ脇役であるシモン

の友達に関する描写は最小限に抑えられている。やはりここではサガンのビリー・ホリディへの想いが書かれているような気がしてならない。このようにビリー・ホリディは、その名は出さずともサガンの作品の中でさりげなく、小さな居場所を与えられ、人生に、愛に悩める若きシモンを優しく歌声で慰めるという役割を果たしている。それには酒と悲しみが必須であった。シモンを酔っぱらせ、恋の病に悩み、絶望と悲しみに打ちひしがれるシモン=自分(サガン自身)として“レディ・デイ”のそばに用意したのではないだろうか。

Dans le cabaret, à une table de voisine de la leur, elle reconnut deux femmes un peu plus âgées qu'elle qui travaillaient parfois avec elle et qui lui adressèrent un sourire surpris. Quand Simon se leva pour la faire danser, elle entendit cette petite phrase ; «quel âge a-t-elle maintenant?»

Elle s'appuya contre Simon. Tout était gâché. Sa robe était ridicule pour son âge, Simon un peu trop voyant et sa vie un peu trop absurde. Elle demanda à Simon de la raccompagner. Il ne protesta pas et elle sut qu'il avait, lui aussi, entendu.¹²⁾

キャバレーの中で、彼らのテーブルの隣に、ポールは知り合いの二人の女性がいるのに気がついた。彼女たちはポールよりも少し年上で何度か一緒に仕事をしていたことがあった。彼女たちはポールに驚いたほほ笑みを送ってきた。シモンがポールにダンスさせようと立ち上がったとき、彼女はこの一言を聞いた。「彼女、今いくつ？」

ポールはシモンに寄りかかった。すべてが台無しだった。ドレスは彼女の年齢には滑稽だったし、シモンはちょっと目立ちすぎたし、彼の人生は普通ではなかった。ポールはシモンに連れて帰って欲しいと頼み、彼もそれに反対しなかったので、やはり彼もあの一言が聞こえたのだと分かった。

この場面は決定的である。ポールにとってこれは耐え難かった。奥ゆかしい、自分の思っていることも恋人にストレートに聞けないポールは傷ついた。

キャバレーはポールにとって、最悪な場所になったに違いない。ロジェと夜遊びに行けば自分自身で、次の日100歳のように感じるし、若いシモンとならば、と行ってみれば胸元が開いたシモンの選んだドレスを

着て、飲めないシャンパンを飲み、最高にご機嫌だったのに、運悪く知り合いに、それもポールより年上の女性たち、に出会ってしまい、馬鹿にされる（と感じた）。ポールはシモンのことは愛していてもやはり彼女にとっての「常識的な範囲」から出ていくことは無理だったのである。この場面で、キャバレーはどちらにしてもポールに「老い」というものを自覚させるツールとして機能している。このあたりの場面設定と主人公の心理描写にはサガンのまだ未熟な「若さ」が逆に表れていて、キャバレーという場所設定を中心に出版当時24歳という作者自身の感覚と39歳の女性主人公が対のように感じられる。まだまだ遊び盛りの作家サガンは、39歳の保守的で知的なポールをキャバレーという俗っぽい場所からこうして追い出して見せた。これでポールの性格はより鮮明に印象付けられ、物語の終盤への大きな足掛かりとなるのである。つまりポールは最後、「わたしもうおばあさんなのよ」と泣きながらシモンに別れを告げ、浮気症が結局治っていないロジェに戻るという結末が用意されているのである。

第三章 「ブラームスのコンサート」

最後に題名でもある「ブラームスはお好きですか？」という文章が頻出する場面である。ここでは引用が長いので、続きの文だが訳を途中で挿入しながら記述した。

«Il y a un très beau concert à six heures, salle Pleyel, écrivait Simon. Aimez-vous Brahms? Je m'excuse pour hier.» Elle sourit. Elle sourit à cause de la seconde phrase ; «Aimez-vous Brahms?» C'était le genre de question que les garçons lui posaient lorsqu'elle avait dix-sept ans. Et sans doute les lui avait-on posées plus tard, mais sans écouter la réponse. Dans ce milieu, et à cette période de la vie, qui écoutait qui? Et d'ailleurs aimait-elle Brahms?¹³⁾

「今夜六時にプレイエルホールで素敵なコンサートがあります。ブラームスはお好きですか？昨日は失礼しました。」とシモンは書いていた。彼女は微笑んだ。それは二つ目の文章のせいだ。「ブラームスはお好きですか？」これは彼女が17歳のころ、男の子たちが彼女にしたような質問だった。もっと後にも、もちろん同じような質問があっただろう

が、それは答えを聞かないものだった。この世界で、それに人生のこんな時期に誰が誰のことをちゃんと聞いているだろうか？それにだいたい彼女はブラームスが好きなのだろうか？

Elle ouvrit son pick-up, fouilla parmi ses disques et retrouva au dos d'une ouverture de Wagner qu'elle connaissait par coeur un concerto de Brahms qu'elle n'avait jamais écouté. Roger aimait Wagner. Il disait ; «C'est beau, ça fait du bruit, c'est de la musique.» Elle posa le concerto, en trouva le début romantique et oubli de l'écouter jusqu'au bout. Elle s'en aperçut lorsque la musique cessa, et s'en voulut.¹⁴⁾

彼女はレコードプレイヤーを開いて、彼女の持っているレコードの中をくまなく探し、そらで覚えているワグナーの序曲の後ろに、彼女が一度も聴いたことがないブラームスのコンチェルトを見つけ出した。ロジェはワグナーが好きだった。彼は言っていた。「美しい、景気がいい音がするし、これこそ音楽だ」と。彼女はこのコンチェルトをかけた。はじめはロマンティックだと思い、それから最後まで聴くのを忘れてしまった。音楽が止んだときにそのことに気づき、そんな自分に腹が立った。

À présent, elle mettait six jours à lire un livre, ne retrouvait pas sa page, oubliait la musique. Son attention s'exerçait plus que sur des échantillons de tissus et sur un homme qui n'était jamais là. Elle se perdait, elle perdait sa propre trace, elle ne s'y retrouverait jamais. «Aimez-vous Brahms?» Elle passa un instant devant la fenêtre ouverte, reçut le soleil dans les yeux et en resta éblouie. Et cette petite phrase ; «Aimez-vous Brahms?» lui parut soudain révéler tout un immense oubli ; tout ce qu'elle avait oublié, toutes les questions qu'elle avait délibérément évité de se poser. «Aimez-vous Brahms?» Aimait-elle encore autre chose qu'elle-même et sa propre existence? Bien sûr, elle disait qu'elle aimait Stendhal, elle savait qu'elle l'aimait. C'était le mot ; elle le savait. Peut-être même savait-elle simplement qu'elle aimait Roger. Bonnes choses acquises. Bons repères. Elle eut envie de parler à quelqu'un, comme elle en avait envie à vingt ans.¹⁵⁾

今では彼女は一週間のうち6日は一冊の本に費や

し、どこを読んでいるのかも分からず、音楽は忘れていた。彼女の関心は生地の見本と、いつもここにいない一人の男にのみ注がれていた。彼女は自分自身を見失い、自分自身の足跡を失い、再び見出すことがなかった。「ブラームスはお好きですか？」

彼女は束の間、開いた窓の前に行き、太陽が目の中に入り、目がくらんだ。このさりげない一言。この「ブラームスはお好きですか？」は彼女に急に膨大な忘却が現れたようだった。つまり彼女が忘れてしまったすべてのもの、彼女が自分自身に問いかけるのを意図的に避けてしまっていた疑問の数々である。「ブラームスはお好きですか？」彼女はまだ自分自身以外のものと自分の存在そのものを好きだったのだろうか？もちろん彼女はスタンダールが好きだと言ってきたし、確かに好きだったことは分かっていた。しかしそれはただ単に言葉だ、ということを知っていた。もしかしたら彼女はただ単にロジェを愛しているという言葉を知っていただけではないだろうか。思いがけない発見で、いいしるしだ。彼女はまるで20歳のころそうだったように、誰かしらに話したい欲求に駆られた。

一人きりで過ごす日曜の朝に、シモンからのブラームスのコンサートの誘いの手紙は、ポールにとって新鮮だった。あまりにもシンプルな「ブラームスはお好きですか？」という問いかけは、ポールに内省を促すきっかけを与える。この数年はすべてが仕事とロジェ中心の生活だったポールにとって、好きだったもの、音楽を聴くことや夢中になって読書することなどは遠い忘却のなかだった。それがこの「ブラームスはお好きですか？」という一つの質問によって溢れだす。

ここでなぜブラームスなのかというと、ロジェの好きなワグナーとポールがこの引用のあとの部分でモーツァルトが好きだと言う場面があることから、サガンの遊び心としてクラシック音楽の歴史的な知識が織り込まれている。同時代を生きたワグナーとブラームスは犬猿の仲であることが知られている。そしてブラームスはモーツァルトを敬愛していた。つまりワグナーがロジェであり、ブラームスはシモンであり、モーツァルトがポールなのだ。この小さな遊び心は実はポールをめぐって二人の男が火花を散らすこの物語の先をさりげなく暗示しているとは考えられないだろうか。

そしてポールは迷った挙句、コンサートに出かけることにした。言い訳としては、もともと音楽が好きだったのだからそれを再発見しに行こう。すでに心の中

で気になり始めた25歳のシモンに会いに行くのではないのだということを自分に言い聞かせているのである。しかしこの決心は結局音楽を再発見するという当初の目的以上に、自分の心に素直に行動する、というポールが忘れていた部分に気付くことになり、シモンとの関係が始まる前の大きな序章として描かれているのだ。そしてこのプレイエルホールのコンサートは、ロジェが車のラジオで偶然耳にするという場面へとつながり、カップルがお互い別の相手とブラームスの音楽を聴くという状況を生み出し、そこからポールとロジェの関係が変化していくきっかけとなるのだ。

おわりに

以上のように『ブラームスはお好き』の中でみられる音楽的要素を含んだキーワード、「ラジオ」「キャバレー」「ブラームスのコンサート」に関連した描写を三つのキーワードをそれぞれ引用を用いて見てみると、それぞれの一目さりげないモチーフ描写がきっかけとなって、登場人物たちの心の中の動きへと発展し、その心理描写がこの物語の流れを作っているということが分かる。他に音楽というフィルターではなくともこういった役割を持った、さりげないモチーフはサガンの小説のなかで、大いに散りばめられていて、ただ単に文字を追いつストーリーを読むだけでは見えてこない作者と作品の関係性にも思いを巡らせて行けば、何通りもの読書の仕方がある。こういった、「散りばめられた小さなモチーフ」を見つけ出し、それをもとに読んでいくと、「ストーリー性に欠ける」「どの作品も似ている」などと評されることも多かったサガンの作品群を読み、考察するにあたってこれからも続けていきたいテーマの一つである。

注

- 1) *Avec mon meilleur souvenir*, Françoise Sagan, Gallimard, 1984 p 59 *La Vitesse* という章で、サガンは自身の車、及びスピードへの情熱を語っている。
- 2) *Françoise Sagan Oeuvres*, (p 255. *Aimez-vous Brahms?* Julliard, 1959), Françoise Sagan, Robert Laffont, 2004 今回はこのサガンの作品集より引用している。
- 3) *Françoise Sagan Oeuvres*, Françoise Sagan, Robert Laffont, 2004, p 259.
- 4) *Ibid*, p 283.
- 5) *Ibid*, p 306.
- 6) 『遊びと人間』, ロジェ・カイヨワ, 講談社, 1990.
- 7) 「クラブ」はフランス語で *la boîte de nuit* と言う。実際この作品中にも踊りに行く場所として, *le cabaret* と

- 同じように使われている。*Françoise Sagan Oeuvres*, Françoise Sagan, Robert Laffont, 2004, p.260.
- 8) *Françoise Sagan Oeuvres*, Françoise Sagan, Robert Laffont, 2004, p.267.
- 9) 以下の作品を参照のこと。『サンジェルマン＝デ＝ブレ入門』, ボリス・ヴィアン, 浜本正文訳, 文遊社, 2005
- 10) *Françoise Sagan Oeuvres*, Françoise Sagan, Robert Laffont, 2004, p.295.
- 11) *Avec mon meilleur souvenir*, Françoise Sagan, Gallimard, 1984, pp.11-40.
- 12) *Françoise Sagan Oeuvres*, Françoise Sagan, Robert Laffont, 2004, p.311.
- 13) *Ibid*, p.278.
- 14) *Ibid*, p.278.
- 15) *Ibid*, p.278.

参考文献

使用テキスト

- ・*Françoise Sagan Oeuvres*, Françoise Sagan, Robert Laffont, 2004

参考文献

- ・『ブラームスはお好き?』フランソワーズ・サガン, 朝吹登水子訳, 新潮社, 1961
- ・*Avec mon meilleur souvenir*, Françoise Sagan, Gallimard, 1984
- ・『M/D マイルス・デューイデイヴィス III 研究』菊地成孔, 大谷能生著, エスクァイア マガジン ジャパン, 2008
- ・『サンジェルマン＝デ＝ブレ入門』, ボリス・ヴィアン, 浜本正文訳, 文遊社, 2005
- ・『サガン 疾走する生』, マリー＝ドミニク・ルリエーヴル, 永田千奈訳, 阪急コミュニケーションズ, 2009